

『近代経学と政治 (近代経学と政治)』

(湯志鈞著)

解題と訳注〔1〕

阿 川 修 三

『Modern Chinese Classical Learning and
Politics』 (by Tang Zhi-jun)

Comment and translation 〔1〕

by Shuzo Agawa

解 題

本稿は湯志鈞著『近代経学と政治』（中華書局、1989年）第八章「経学の終結」第三節「五四運動と経学の終結」の日本語訳である。湯志鈞氏は現代中国の著名な、中国近代思想史・近代経学の研究者であり、その令名は海外まで轟いているが、日本では一部の中国近現代の研究者を除き、あまり知られていないので、まずその経歴・学問^①についてご紹介しよう。

湯氏は、1924年江蘇省武進県（今の常州市）に生まれた。彼のご母堂は、清末公羊学派の大儒、莊存与の後裔で、経学の素養があり、幼少から氏はご母堂から『論語』を始めとして『四書』を習い、経学の手解きを受けた。1937年、日中戦争が勃発すると、常州も日本軍に占領され、氏は当時、中学生であったが奴隷化教育を拒否し、中学に行かず、家庭教師に就いて、英語・数学の他、史記・経書を学び、経学の基礎を徹底的に鍛えられ、次第に中国の伝統学術である経学に心ひかれていった。そして、当時上海に疎開していた無錫国学専修学校（以後国専と略称する）に入学し、歴史を専攻した。ここでは、呂思勉・周予同・周谷城の三氏に影響を受けた。その中でも同郷で、彼と同様に今文経学を学んだ経験を持ち、経学・歴史に

精通した呂氏に最も強い影響を受け、彼からは学問の方法として实事求是（事実に拠って真理を探究すること）を徹底的にたたき込まれた。その後、1941年、上海が日本軍に占領されると、彼は主に経済的理由から、一時休学し、常州郊外の共産党の遊撃地区で中学教員を勤めた。

日中戦争終結後、復旦大学で国専の未修得単位を取り、1947年、国専歴史地理科を卒業した。その後、1950年まで復旦大学に勤め、この頃、劉師培の『経学教科書』に注釈を付けた。1951年から56年まで、常州市愷樂中学・正衡中学・第一中学で国語・歴史を教え、この頃、湯氏は研究分野を経学から近代思想史に移した。これまで彼が研究してきた経学は、新中国建国後では、古い物＝封建的なものとされ、それを研究することも同様に保守反動的であると見なされ、彼は専門分野を移さざるをえなかったのである。もちろん、この変更には、内発的理由も容易に想像できる。日本占領下の常州で、新四軍（共産党系抗日軍）が、統率がとれかつ自由な精神に溢れていたのを見、また戦後の上海では、国民党の腐敗と暴虐を目の当たりにした、湯氏は、新中国の成立を、多くの同時代の知識人と同様歓喜して迎えた。彼はこの新しい時代・国家のために、これまで研鑽してきた経学を生かし、アヘン戦争以来、伝統経学が時代の変化にどう対処し変遷し、終結していったかを明らかにしようとしても不思議ではない。彼が選んだテーマは戊戌変法史で、特に康有為に興味を持った。それはこれまで学んだ今文経学の知識を生かせると考えたからであった。彼は昼間は授業、夜間は自分の研究という生活を堅持し、その中で生まれた成果が『戊戌変法史論』（上海群聯出版社、1955）、『戊戌変法事物伝稿』（中華書局、初版1961、増訂版1982）である。

1956年、中国科学院上海歴史研究所（後の上海社会科学院歴史研究所）に、呂思勉氏の推挽により勤務することとなり、主に上海の近代史関係の史料編纂に携った。常州時代以来の、夜間に自分の研究をするという習慣

は続き、夜間は自宅で、師である周予同氏を助けるために、『辞海』の経学史関係の項目を執筆し、周氏と連名の「博士制度と秦漢政治」、「王莽改制と今古文問題」などの経学史の論文を執筆した。またこの頃これまで学んだ古文経学を生かせると考え、辛亥革命史、特に章炳麟もテーマに選び、長年収集してきた章の佚文や『太炎文録』の整理・校訂・標点（句読点を付け、固有名詞に傍線を付ける）の作業を行った。その成果として、『章太炎政論選集』（中華書局、1977）が完成し、また『章太炎年譜長編』（中華書局、1979）の初稿も完成した。

ところが、1966年、文化大革命が起これると、周予同と連名で書いた『博士制度と秦漢政治』などの経学史の論文が、「大毒草」と批判され、五・七幹部学校（知識人の労働改造のための収容所）に送られた。このような状況においても、彼は人目を盗んでは、暇を見つけては研究を継続した。1972年、労働改造から解放されて、『宋史』の校訂・標点の参加した。1978年、再建された上海社会科学院歴史研究所に研究員として復帰し、以後『章太炎政論選集』（中華書局、1977）・『章太炎年譜長編』（中華書局、1979）・『康有為政論選集』（中華書局、1981）・『戊戌変法人物伝稿』（中華書局、1982）・『陶成章集』（中華書局、1986）などの近代中国の伝記・年譜・選集などの基礎資料集、『戊戌変法史』（人民出版社、1984）・『康有為と戊戌変法』（中華書局、1985）の近代史関係の単行本を出版し、康有為・章太炎・近代経学関係の論文も多数執筆発表した。また、1983年の日本を皮切りに、1985年は香港・アメリカ合衆国へ行き、海外での講学・資料収集・学術交流を精力的に行った。

彼の学問の特徴は、大きく二つある。一つは、実証主義的方法論であり、一つは反帝国主義反封建の政治的立場に立ち、思想を政治の流れとの関連で考察する点である。前者は、呂思勉氏から学んだもので、広く資料を渉獵し、それらを丹念に検討するという、地道な基礎作業を通じて、事実を

明らかにし、そして事実間の関係、全体の流れをつかむというもので、派手さはないが堅実である。このことは彼の業績の過半を占める選集・年譜・伝記によっても明らかである。後者は、周予同氏から学んだもので、ある思想、例えば、康有為・章太炎らの思想を抽象的なものと見ず、中国の近現代政治史の中に存在する具体的なものとして捉え、それらと政治との相関関係を明らかにする。その場合、毛沢東の規定した中国近代史の、反帝国主義反封建という枠組みを前提とする。

さて、本書『近代経学と政治』は、第一章導論、第二章漢学の復興、第三章漢学の遞変（次第に変化する）、第四章経学の錮蔽（閉ざし覆う）、第五章経学の改造、第六章「旧学」と「新学」、第七章「革命」、第八章経学の終結、の本文と、付録の近代経学年表からなり、経の定義・今文古文の相違・経学の学派分類などの経学の基礎知識から説き起こし、清初の考証学から五四における経学の終結までの近代経学の流れを政治との関連を中心に概説した大著である。これまで近代経学を鳥瞰した書物は文献の読みにくさもあり、ほとんど見受けないが、幼少より経学の雰囲気になりに接し、今文経学・古文経学のいずれにも精通し、かつそれらを中国現代史の激動をくぐり抜けることによって客観視できた著者にしてはじめてこのような書物が可能となったのではないかと思う。その上、康有為を扱った、第五章経学の改造、章太炎（炳麟）を扱った、第七章「革政」と革命とは、著者の長年の研究成果を取り入れ分量も全体の四割を占め、本書の圧巻となっている。今日、日中両国の学界では、経学をただ単に封建時代の遺物と見るのではなく、今なお我々に深い影響力を持っている、経学のもたらした文化意識に関心が集まり、それについての分析検討が盛んに行われている。つまり、本書はその点でも興味深いもののように思われる。今回はこれまで取り上げられることの少ない、経学が五四文化運動の中で、どのようにして終結していくかを述べた第八章第三節「経学の終結」を訳出した。

内容については、贅言することを控えたいが、最後に、本翻訳の要点は、康有為・崔適から疑古惑経（古代を疑い、経書を怪しむ）の啓発を受けた顧頡剛ら疑古派は、五四期の新思潮の影響を受けて、経書の真偽を疑うだけでなく、伝統的古代史像を覆し、更には儒家の道統説を打破し、神聖にして侵すべからざる経書までも否定し、経書・孔子の権威を根底から揺さぶり、その結果、経学の終結を促したという点にあることだけ述べておく。

訳文の中の〔 〕で囲んだ数字は原注の番号で、○で囲んだ数字は訳注の番号である。なお、訳文に示した割り注は、()は著者が〔 〕は訳者が付けたものである。また引用文には明らかに誤植と思われるものがあるので、それについてはもとの文献に従って直し、その旨は一々注記しなかった。引用文で翻訳の有るものは、それらを参照した。

第三節 五四運動と経学の終結

五四運動は、「徹底的に封建文化に反対した運動であり、中国の歴史始まって以来、このように偉大で徹底した文化革命はまだなかった。」^{〔1〕}それは、封建的社会制度・意識形態を全面的に破壊し、その汚泥・濁水を洗い清め、二千余年思想界を支配した儒教経学も、これから再起不能となり、歴史の舞台から退場した。

経学の終結は、孔子という偶像の動揺と経学市場の消失^②に現れた。かつて、「大成至聖先師」^③である孔子は侵すべからざるものであったが、五四以後、孔子は既にその地位を先秦諸子と同列に扱われ、胡適〔1892～1962〕の『中国哲学史大綱』は、中国哲学思想を老子・孔子から始め、堯・舜・禹・湯から始めなかった。老・莊以前の史料は、『尚書』を採用せず、『詩経』を採用した。このように、孔子と老子とを同等に扱うだけでなく、儒家が宣称した堯・舜・禹・湯の「至盛の治」に疑いを表明し、儒経に記載された堯・舜・禹・湯の事跡にも疑いを表明した。これ以後、疑古〔古代

を疑い)・辨偽〔経書の真偽を辨别する〕の気風が起こり、地下の考古発掘も加え、儒家經典自体の真偽も検討しなければならず、聖人がこしらえた経書・賢人が著した伝^④も昔日の権威は全く無くなった。当然ながら、何人かの因循保守的な経学者がおり、まだ経学という世襲の陣地にしがみつき守ろうとしたが、ほんのわずかな範囲で「年老いてまで経書の奥義を追究する」だけで、その影響も局部的・一時的であった。辛亥革命後の尊孔読経の喧騒の中で、『孔教会雑誌』という刊行物は何と手が付けられないほど荒れ狂ったことか。それは北京、上海などの大都市で鼓吹し発行しただけではなく、地方の封建勢力も甘んじてその後塵を拝した。たとえば、山西省太原では、『宗聖匯編』を出版し、年号に孔子紀年を用い、袁世凱〔1860～1916、孫文から中華民国大總統の職を奪い、専制独裁政治を行い、後に皇帝になろうとした軍閥〕、黎元洪〔1866～1928、袁世凱の死後大總統となった軍人〕らは自ら題字を書いたり、四川では、『国学匯編』を出版し、第三号から廖平の『尊孔篇』を連載した、などがそれである。五四運動以後はどうか。このたぐいの刊行物はだんだんとその姿を消していった。たとえ、まま、そのようなものが刊行されても販路は広くなく、程無く廃刊となった。あのしばしばその主張を変えた経学「大師」は、その様子も既に一変した。康有為は保皇復辟〔帝制を復活し、清の宣統帝を皇帝に担ぎ出す〕によって罵倒を浴び、その一生を終え、廖平もその主張を何度となく変え、牽強附会し、その結果、窮地に陥った。

経学の終結は、封建勢力が再び「経学」という破れ旗を揚げたが、それを信ずる者は益々少なくなり、帝国主義者も表立って尊孔読経を行うことは決してなかったことに現れた。民国初年、尊孔の濃霧が立ち込め帝制復活の陰謀が企まれたが、ロシアの封建貴族カイザーリング^⑤も「孔教は中国の基礎である」とわめきたてることに追随して、彼は「孔子学説の有利な条件に注目し」、帝制復活派と何度も連絡を取り、一犬形に吠ゆれば、百犬

声に吠ゆるごとく〔一人がでたらめを言うと、人はすぐにこれを事実として伝え〕侵略活動を展開した。「五四」以後には、このような状況は殆ど見られなくなり、たとえ何人かの清朝の遺老が孔孟の道を宣伝したとしても、それに賛同する者は、その数、寥寥たるもので、いずれも「むくろ・枯骨」の類で、ほとんどものを尋ねる人もいないという状態であった。

経学の終結は、また思想界は二度と経学を中心に展開せず、経学の羈絆から脱け出したことにも現れた。「五四」以後、マルクス主義が瞬間に伝わると、進歩思想を持った知識人は、かつてのように儒家の經典の中に自分の理論の根拠を探すことをせず、儒経を研究・整理の対象とした。かつてのように孔子にひれ伏し崇めることはせず、孔子を代表とする儒家思想をきちんと整理した。つまり、一世を風靡した乾嘉時代の漢学から見れば、考証の方法も範囲も既に全く違い、ただ経書をもとに経書を考証するやりかたはできなくなり、考古発掘を重視し、諸子の群籍を参考とし検討しなければならなかった。かつて歴史を研究しようが、文学を研究しようが、その他の「国故」〔中国の文化〕についても、経書を基準としないことはなく、「子」・「史」・「集」を信用しないことはかまわないが、「経」を必ず信用しなければならなかった。そこで、哲学史を講ずる場合は、伏羲が八卦を描いたことから説き始め、文学史を講ずる場合は「虞書」〔『尚書』の篇名〕を虞舜の時代の文学とした。「五四」以後、経書は古代史の資料となり、審査を経て、その中に孔子以後の儒家の贗物もあれば、歴代の儒家が解釈した憶説もあることを発見した。「経」の地位が動揺して、それは古代史を講ずる唯一の「經典」ではなくなり、二千年来思想界で支配的地位を占めてきた経学は終結した。

経学が終結し、経書が古代史の資料となったのには、顧頡剛や彼を代表とする「古史辨」派^⑥が大きな役割を果たした。

そこで、顧頡剛先生の経学観から「五四」の社会の動揺やその思想の変

化を見い出すことができるのである。

顧頡剛は一九一三年北京大学予科に入学し、章太炎〔炳麟〕の国学会での講義を聞いたことがあり、彼に大変敬服した。「古文家は理に叶っているが、今文家は全くでたらめな人だと思った。」^[3]すぐに、彼は康有為の著作を読み、そこで、「今文家に対して公平に見られるようになり」、上古の事跡については「茫昧無稽〔ぼんやりとしてよくわからず、根拠がなくでたらめ〕」という考えには、「心に叶い、理に叶う」と感じ、康有為の「鋭敏な観察力には充分な敬意を表さないわけにはいかない」^[4]と思った。一九一六年、顧は北京大学文科中国哲学科に進んだが、宋代の理学には「興味を感じず、」胡適の影響も受けた。「胡適が『中国哲学史』を講義し、唐、虞、夏、商を捨て置いて、直に周の宣王から説き始めたこと」が、「上古の歴史は信頼できないという観念は、『改制考』を読んだ後に、このようにして再び温められた。」^[5]更に進んで、『偽経考』に標点〔句読点と、書名・地名・人名に傍線を付けること〕を付し、『辨偽叢刊』の編集を開始し、一つ一つ、偽史の中の事実がどこから起こり、またどのように変遷したかを調べようとした。「一つ一つ偽史の中の事実を調べ、この人がどのように言ったか、あの人もまたどのように言ったかを列挙し、比較検討し、まるで裁判をするように彼らのでたらめを言い逃れることのできないようにした。」あわせて、「彼らの偽作のタイプを探し出した。」自ら、次のように言っている。「私が旧来の古代史像を覆そうとした動機は、もともと、『孔子改制考』がはっきりと上古の事跡については「茫昧無稽〔ぼんやりとしてよくわからず、根拠がなくでたらめ〕」であることを指摘したことに啓発されたからである。この頃になると、更に長素〔康有為〕先生の卓識に傾倒した。しかし、私は今文学の態度には、全く敬服できなかった、」と。なぜか。彼は、康有為は「歴史の真偽を弁別することを手段とし、改制（政治制度を改革する）を目的とし、それは、政策を運用するためであって、学問を研究す

ることではなかった^[6]と、考えたからである。顧頡剛は、自分の仕事は、「手段と目的を一致」させようとした。

これと同時に、彼はまた崔適の講じた、今文の陣営を厳守する『史記探源』、『春秋復始』も聞き、『春秋公羊伝』、『春秋繁露』を句読点を付けて読み始めた。一九二〇年、大学卒業後、錢玄同と知り合った。錢玄同は、章太炎の弟子で、また康有為の『新学偽経考』や崔適の影響を大いに受けた。彼は「今文古文いずれにも通暁していたが、今文古文いずれにも満足していなかった。」錢玄同は一度ならず、次のように言った。「今文学は孔子学派を伝承し、展開させたものだが、長年の墮落変質を経てその本来の姿を失った。古文という新勢力が突如出現して、古文家は、少しばかりの古代の資料を手に入れ、それを自分たちの考えで整理改造し、寄せ集めてその古文学を完成した。かれら古文学の目的は、その古文によって今文家の向こうを張ることであった。だから、今文学が古文経は偽造であることを攻撃することも正しいし、古文家が今文家は孔子の真意を伝えていないと攻撃するのも正しい。我々は今日、古文家の主張で今文家を批判し、また今文家の主張で古文家を批判しなければならない。彼らの両方の偽りの姿を一緒に引き裂いて、初めて彼らの真の姿がはっきり現れるのだ、」と。この議論は、顧頡剛に「目の前に入口が開かれたように、我々に進んでこの二千年来の学術史上の大案件に最終的判斷をさせた。^[7]」

この後、顧頡剛は大学での講義の中で、経学中の今古文問題により認識を深めるとともに、上古史の材料を系統的に収集して、続けざまに『古史辨』を編集出版した。

顧頡剛の論文と彼が編集した『古史辨』で書いた論文で、どのような点が今文経学の影響を受けたのか。また、その文章の中に、今文に敬服できないどのような点があり、今文に比べて発展したところがあるか。

顧頡剛が、経籍の真偽に疑いをもち、古代史を弁別分析したのは、康有

為の『新学偽経考』の啓発を受けたからである。康有為は「初めて偽作をし、聖人の定めた経書を乱したのは劉歆から始まり、偽経を普及させ、孔子の学統を篡奪した者は鄭玄に完成し、」⁽⁸⁾「劉歆は王莽が漢から皇位を篡奪することを助け、王莽もまた劉歆が孔子の学統を篡奪することを助けた、」⁽⁹⁾と考えた。顧頡剛も「劉歆が数種の古文経伝を学官に立てようと争った。我々はその時彼が善意であったことを認めるが、彼の偽作竄入は確実な事実である、」⁽⁹⁾と考えた。「劉歆はにせの骨董を偽造し新朝の文化を開き、それを世に流行させようとした。それにはなにがしかの時代の要請を入れない訳にはいかず、権勢者を鼓動する、護法の方術を作った。」だから、「王莽を助け、漢から皇位を篡奪するのを助け、」⁽¹⁰⁾「国師となった。」康有為は、古文経の由来という問題を提起し、崔適の『史記探源』では更に次のように言った。「『史記』は本来、今文学であったが、劉歆の改竄によって古文説も混入した、」と。顧頡剛は『史記』『五宗世家』と『漢書』『景十三王伝』とを比較し、「その真偽を弁別し」、更に「『史記』『儒林伝』『叙録』伝経系統異同表」⁽¹¹⁾を著した。

顧頡剛が、経籍の真偽に疑いを持ち、古代史を辨別分析したのは、同時に康有為『孔子改制考』の啓発を受けたからでもある。康有為は、孔子以前の歴史は、孔子が救世・改制の目的で仮託した宣伝のための作品であり、いずれも「茫昧無稽」で、中国の歴史は、秦漢以来はその真の歴史を調べることができる、と考えた。顧頡剛は次のように言った。「中国の歴史は一般に誰も五千年あることを知っているが、偽史と、偽書を抛り所にして成り立っている偽史とを除くと、実は二千余年あるだけで、半値に値切る勘定となる。ここに気がつく、思わず私の偽史を覆そうとする壮志を引き起こした。初めは偽書の中の偽史を覆そうとだけ思ったが、この頃になると、真書の中の偽史までも覆そうと思うようになった。『孔子改制考』の第一篇を読んでから、五、六年温めて、この頃になって初めて旧来の古代史

像を覆そうとする明瞭な意識と明確な計画を持った、」と。顧頡剛は自ら次のように言った。「私の、旧来の古代史像を覆そうとする動機は、もともと『孔子改制考』がはっきりと上古の事跡については茫味無稽であることを指摘したことに啓発されたからである、」^{〔12〕}

顧頡剛は今文経学の「疑古惑経（古代を疑い、経書を怪しむ）」の啓発を受けて、『辨偽叢刊』の目録の草案をつくり始めた時、それには『新学偽経考』、『孔子改制考』と『史記探源』などの著作があった。また劉逢禄の『左氏春秋考証』については、「しきりに称賛して」、校訂を施し、句読点を付す作業を進めた。また、彼は銭玄同の意見に基づき、『新学偽経考』の「『漢書芸文志』辨偽」の『左伝』と『国語』を辨別した一段、崔適の『史記探源』の「序証」と「十二諸侯年表」との二篇の中の『左伝』を辨別した数段、『春秋復始』の「序証」の『左伝』を辨別した数段を、その全巻の補篇として付録とした。『古史辨』第三冊では、更に『易経』と『詩経』とを専ら検討し、「その中心の思想は、伏羲・神農にこじつける『周易』の聖經の地位を破壊して、その本来の占いの書としての姿にもどし、文王・武王・周公にこじつける『詩経』の聖經の地位を破壊して、その本来の樂歌としての姿にもどすことであつた。」^{〔14〕}

しかし、顧頡剛は康有為の「卓識」には傾倒したが、「今文家の態度には全く敬服しなかつた。」「彼は今文家が辨偽を手段として、改制を目的とするのは、政策を運用するためであつて、学問を研究するのではないと考えた。彼らの政策は、先ず第一歩で上古の歴史を覆し、その後、第二歩で孔子が古に託して六経を著し改制したことを説き、更に進んで第三歩で自分の改制を孔子をその先例として引き出し助けとした。彼らの目的はただ政策を運用して自分たちの方便にするに過ぎなかつた。だから、非常に浅薄な讖緯〔漢代に孔子に託して作られた未来予言の書〕さえも借りて自分の武器として放そうとはしなかつた。彼らは政策と学問とを一つに混ぜ合わ

せたので、学問上でもいともやすやすと自分の理性を奇怪ででたらめな説の下に屈伏させていくのである。^[15]つまり、顧頡剛は、康有為は変法改制という政治目的のために、「上古の事跡については茫昧無稽である」ことを宣伝し、その結果「政策と学問とを一つに混ぜ合わせて」、讖緯迷信の奇怪ででたらめな説にこじつけて「理性」を「屈伏させていく」ことをやめようとはしない、と考えた。このように、彼らは、迷信の奇怪ででたらめな説を「怪しむべきだとしながら、結局怪しいとはしようとはせず、」ついには「自分を欺き、人を欺くことになった。」^[16]顧頡剛が古経の真偽に疑いを持ったのは、古代史の「茫昧無稽」な濃霧を払いのけ、古代史について弁論し、真の歴史にもどそうとしたからであった。彼は先人の研究の基礎の上に、「時代が下がれば下がるほど、伝説の古代史の期間は長くなる」という「累層的に形成された古代史説」を提起し、更に劉歆は学者ではなく、政客であることを弁析し、「五徳終始の下での政治と歴史」(『古史辨』第五下編 1935年 所収)を著した。当然ながら、顧頡剛が劉歆を攻撃したのは、歴史を捏造し、「王莽を助け、その篡奪を助けた」からであり、彼の方法は、相変わらず今文学派のそれであり、多かれ少なかれ、過去の方法を繰り返している。しかし、彼の学問の方法はただ旧説を踏襲しているのではなく、「今の仕事を清代の今文家より、一步進めようとした」のである。^[17]彼が「清代の今文家より一步進んだ」点は、「累層的に形成された古代史説」に発展させただけではなく、より重要なのは、過去の「道統説」を打破したことであった。彼は次のように言った。「これまでの、人が学問をする最大の望みは道統を継承することであった。古文家が偽経を捏造したのもこのためだし、清代の今文家が偽経を排除したのもこのためであった、」と。^[18]

もともと、儒家の伝統思想の下では、何々の儒家の伝道の系列があると言うことであり、「五百年の間には、必ず王者が興り」、孔子の正統を継承したと自任したと言うことである。唐の韓愈は「原道」篇を著し、仏教・

老荘思想を斥け、所謂「堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子・孟子」の道の伝授の系列説を提唱し、またどっしりと重々しく、孟子を継承したことを自任し、宋代道学の先ぶれとなった。宋儒の朱熹は、周（敦頤）、程（顥・頤）が孟子を継承したとし、自分はその周・程に繋げて、儒学の正統を主張し、韓愈を打ち捨て無視した。このような「道統説」は封建支配階級のお守りとなった。康有為は、『孔子改制考』で、孔子以前の歴史は「茫味無稽」であると言っているにも係わらず、また、「堯・舜は孔子が仮託したもので」、「經典にある、堯・舜の大いなる徳・大いなる事業はいずれも孔子の理想によって形つくられたもので」、^{〔19〕} 経は孔子が著したものであるとした。そして、彼は、昔ながらのやり方で、ブルジョア階級の必要とするものを孔聖人の看板の上に掛け、孔子を「神明なる聖王・改製の教主」と言い、変法の根拠となるものを儒家の経籍の中から探し出し、孔子という亡霊にお出ましを願ひ、孔子を盲目的に崇拝する人に、衣装替えした孔子という神を信奉させ、まだ孔子の真伝を受け継ぎ、孔子の系統を継承したことを自任した。

顧頤剛はそうではなかった。彼は次のように言った。「これまでの、人が学問を治めることの最大の望みは、道統を継承することであった。古文家が偽経を捏造したのもこのためだし、清代の今文家が偽経を排除したのもこのためであった。しかし、今日になると、孔子の勢力は以前のそれには遠く及ばなくなった。我々はこのような「正統を求める」観念を打破し、そのような観念を「真実を求める」^{〔20〕} 観念に替えるべきである。」顧頤剛はただ伝統の経籍に疑いを持っただけではなく、「孔子は六経を刪述〔文章の良くないところを削り良いところを述べ伝える〕した」ということを信奉しなかった。彼は「六経は本来周代に通行した数部の書物であり、『論語』には孔子が六経を刪述したという記事は見つけられず、時代が下って、『孟子』〔離婁下〕にやっと孔子が『春秋』を著したとあるだけであった。更

に時代が下って、『史記』〔「孔子世家」〕に、やっとな孔子が『易』に贊を書き、『書経』に序を書き、『詩経』を刪定〔不当の字句を削り、整理する〕したとあるだけで、更に後の『尚書緯』に、孔子が『書経』を刪定したとあるだけである。更に後の清代の今文学になり、やっとな孔子が『易経』・『儀礼』を著したと言った。つまり、彼らは不完全なものを見ては、それを孔子が刪定したと指摘し、完全なものを見ては、それを孔子が著したと指摘した。実際、劉知幾〔661～721〕の『史通』の「惑経」を読まれよ。それには、『春秋』がもし本当に孔子が著したものなら、「乱臣賊子」を大いに恐れさせることはできないではないかとある。万斯同〔1638～1702〕の『今文尚書』と『詩』三百篇を疑う」を読まれよ。それには、もし孔子が刪定したとしたら、彼は暴君を奨励し、淫乱を提唱したことになるとある。章学誠〔1738～1801〕の『文史通義』の「易教」を読まれよ。それには、『儀礼』がもし孔子の著したものなら、孔子も王者の典章・制度を僭窃したことを免れなくなるとある。「六経はいずれも周公の定めた旧い典籍である」という説は、すでに今文家によって覆された。「六経はいずれも孔子の著作である」という観念もいま反駁され覆された。^[21]このように、歴代の封建支配階級が「公認した」儒家経籍の地位は既に動揺し、知識分子が信奉してきた孔子という偶像も動揺した。この点から言えば、『古史辨』の反封建の意義は明らかであり、儒学経学の終結を促すことに役割を果たした。

顧頡剛は大胆に古代経書の真偽に疑いを持ち、更に伝統的歴史観に疑いを持つことに発展し、これらの神聖にして侵すべからざる經典を否定し、新史学の建立を促し、五四以来の反封建の中でも重要な役割を果たした。

顧頡剛は五四時期、北京大学に学び、新思潮の影響を受けて、「初めて旧思想を打破する明確な意識を持った。」^[22]彼は今文経学の啓発を受けたが、二千余年の間支配してきた儒家経学には疑いを生じた。彼は長年伝承されてきた儒家の道統説を既に認めないだけでなく、儒家が宣伝した堯・舜・

禹・湯の「至盛の治」をも認めなかった。このように、儒家經典自身の真偽は、検討せねばならず、聖人がこしらえた「経」・賢人が著した「伝」の地位も昔日の勢いはなかった。かつて清代の崔述・姚際恒はいずれも書物の真偽を辨別し、顧頡剛も彼らの影響を受けたが、彼自身次のように言った。崔述の書物は私に古書の伝・記が信用できない点を啓発し、姚際恒の書物は伝・記が信用できないだけでなく、経さえもすべては信用できない点を啓発した。しかし、崔述は伝・注に対して経と合致する所は參証し、合致しない所は考辨を加え、依然として儒家經典を基準とした。姚際恒も主として『書経』では梅賾が献じた古文『尚書』が偽書であることを弁証し、『詩経』ではその序を廃することを主張した。顧頡剛は次のように言った。「崔述の『考信録』という書物は、もちろん客観的研究が少なくないが、主観の甚だしい、儒家の道を守るための議論も少なくない、」と。『洙泗考信録』の「宗経」・「考孔」などがその一例である。顧は「儒家の道を守るための議論」に反対し、果敢に封建的伝統へ痛撃を加えようとし、神聖にして侵すべからざるものとしての經典を否定した。

かつて、古文経学家と今文経学家とは、孔子と六経との関係にもそれぞれ異なった見解を持っていたが、孔子の権威・地位については、対立することはありえなかった。これに対して『古史辨』は、これら古文学・今文学の学派の立場を超越し、自己の見解を提起した。顧頡剛は次のように言った。「私は次のように考える。孔子は『詩経』とだけ関係があるが、それもただ人に『詩』を学ぶことを勧めただけのことで、『詩』を自ら決して判定していない。『易』・『書』・『礼』・『春秋』については、彼とは関係がないと言ってもかまわない。たとえ関係があることを認めるとしても、それは「用いた」という点にあり、「著した」という点にはない、」と。^[23] 彼は古文経学家の、孔子は「述べて作らず」と言う説を乗り越え、今文経学家の、孔子は「六経を著した」という説をも乗り越え、「大成至聖先師」孔子の権

威・地位を動揺させた。

顧頡剛と『古史辨』とが経書の真偽に疑いを持ったことは、思想界が経書を中心に二度と展開せず、経学の羈絆から脱け出すことを促した。彼は「中国史を再び整理し、」「いま先ず先人の、経書の真偽に疑いを持った著作を収集し順に配列し我々の先導者とし」^[25]ようとし、更に「中国の歴史界に一大革命を起こさせ」^[26]ようとしたことを明示した。彼は「経書は信用できる歴史書に他ならないという先入観」を否定し、次のように言った。古書の真偽を調査・弁別する場合、「経書は信用できる歴史書に他ならないと信じ、経書の言葉を基準とし、合致するものは真とし、そうでないものは偽とするのは、」「結局その足場は不安定で依拠することができない」^[27]のだ。彼は儒家經典は「信用できる歴史書」ではなく、経書に対する迷信から脱して、中国史を「再び整理し」なければならないことをはっきりと指摘した。

まさに以上の理由から、『古史辨』は出版してすぐに、保守因循の学者の反撃に遭った。これからの、経学という世襲の陣地を踞って守る人は、「突然盤古が存在せず、三皇五帝も存在しないということを知りつけて、そこで騒然とならざるをえなかった。」顧頡剛は「物の怪に取りつかれ、ついに聖廟を一撃して一盛りの塵にするのか。」^[28]劉澹藜は經典の常識に基づいて反駁し、柳詒徴は皮肉げに次のように言った。「今の学者が文字によって古代史を研究しようとするれば、先ず許書〔『説文解字』〕を熟読し、清代の儒者の著述に潜心し、そのあとに、再び疑古を議論すればよいのだ、」^[29]と。しかし、『古史辨』第一冊は「一年の内に、二十版まで版を重ね」、それは伝統的封建文化の破壊に、広範に影響を及ぼした。

『古史辨』には「破壊があるだけで、建設がない」と考える人もいるが、顧頡剛はそのような意見にこのように対処した。彼は次のように言った。「私は学術界では分業すべきだと思う。」自分は「この方面（破壊）を多く

やりたい、」と。実際のところ、古い物を破壊しなければ、新しい物を打ち建てることは難しいのだ。顧頡剛の「破壊」は、経典に対する否定、孔子に対する懐疑を意味するだけでなく、そのうえ儒家経学二千余年の伝統の影響をその輪郭を描き、暴露した。彼は次のように言った。「漢という国家は、封建社会の気風を脱することができず、そのため、孔子の道は頓挫するはずがなかった。漢以後二千年の間、社会は一度も変化せず、そのため、孔子の道もこのように長く伝承され広まること⁽³⁰⁾ができた。」孔子はすでに封建時代の聖人なのだから、二十世紀の中国においてなぜいまだにこのような時代遅れのものに恋恋としていなければならないのか。

同時に、顧頡剛が破壊に注目したのは、破壊ができた後に、新しい建設ができるようにするためであった。彼は「考古学者のために、掃除の仕事をし、彼らの新しい系統を旧系統にまわりつくつかれないようにさせることを願⁽³¹⁾った。」彼は晩年、回顧録の中で、王国維への心服、学問上受けた影響の深さを依然として追想した。彼は王国維が大胆に書物の辨偽することができず、「偽史」を用いたことに、不満を示したにもかかわらず、「彼は博学でまた創造力に最も富むと考⁽³²⁾えた。」顧頡剛は、王国維が考古発掘を利用し、史学を「建設」したことに、依然として敬服していたことがわかる。

当然ながら、顧頡剛は確かに「破壊」に注目したが、経学家の枠からまだ完全には脱していない場合もあり、そこにはある程度の限界が存在した。しかし、顧頡剛の伝統的古代史像への懐疑は、疑いなく史学発展のための重要なステップであり、歴史的に肯定しなければならない。彼と『古史辨』とは、非科学的で非合理的な古代史の伝統を掃蕩し、封建という濃霧をきれいに振り払い、経学の権威を動揺させた点において、不滅の貢献があった。

顧頡剛が、崔適の講じた、今文学の陣営を厳守した、『史記探源』・『春秋

復活』の影響を受けたことがあると言ったことは既に述べた。崔適はどのように今文学の陣営を厳守したのか。彼の『史記探源』・『春秋復始』はまたどのような書物か。それらは經学が絶体絶命の状況の下で著されたが、またどのような問題を反映したか。これらの問題について検討探究することは、經学の終結の理解に助けとなるであろう。^[33]

崔適(1852~1924)、字は顰甫、号は懷瑾、別号は顰盧、浙江省呉興の人である。かつて杭州の詒經精舎に学び、俞樾の弟子で、章太炎と同窓であったことがあり、師俞樾古文經学の薰陶を受けたことがあり、伝統的な経籍にしっかりとした基礎がある。後に康有為の『新学偽經考』の影響を受け、古文学から転じて今文学を治めた。

1911年冬、浙江省で国学会を組織することになり、章太炎に講学を依頼したが、彼は事情により引き受けず、陽誉龍と崔適を代わりに推薦したが、後に沙汰やみとなった。1914年、北京大学に招聘され、『春秋復始』もこの年に完成したが、1920年招聘を解かれた。1922年再び北京大学に職を得、予科の国文教員となったが、吃音で講義が苦手だったので、専ら予科の作文添削を担当した。この時、北京大学では、「經学通論」という科目を開設しようとしていた。それを担当する教員は、講義が「今文学古文学のいずれにも偏しないこと」を求めたが、崔適は今文学を専らに頑なに尊んだため、結局その選から漏れ、彼に替えて陳漢章を招聘し、崔適はまたもや失職した。彼の著作は『春秋復始』の外に、『史記探源』・『論語足証記』・『顰盧經說』・『五經釈要』などがある。学术界に影響の比較的大きなものは『史記探源』・『春秋復始』である。

崔適は「錢玄同に宛てた手紙」の中で、自分の思想の演変を次のように述べた。「康〔有為〕君の『偽經考』は二十年前に著され、經学の真偽を専ら論じた。私はそれまで紀昀・阮元・段玉裁・俞樾の諸公の書物を片時も忘れず諳んじており、それらの書物は根拠がしっかりしていて、清代の初

期の諸儒より優れている。しかし、私の考えるところでは反駁すべき点もある。ところが康の書物にはそれがない。だから、彼の書物は古今に匹敵するものがないほど優れており、もしこの書物がなかったら、私も今古文学を兼ねて宗とし、今に到るまで夢の中にいるがごとく、経学について真髓を知ることがなかったろう。」また、次のように言った。「漢の古文学の偽りを知ることが康君から始まり、私の康君との関係は、ほぼ東晋の『古文尚書』が偽書であることを追究した惠棟と閻若璩とのそれに比せられる。「五徳」の説と『穀梁伝』とはいずれも古文学であり、「文王を王と称し」、「周公が摂政とする」という主義はいずれも今文学であるというようなことはいずれも康〔有為〕が言っていないことであるが、これは言わば、秦から燕に行く場合、康氏という船や車に乗らなければ途中の趙までしか行けず、また徒歩では燕まで行けないようなものである、」と。彼が康有為に心服することかくのごとくであった。『史記探源』・『春秋復始』も康有為の思想的影響を受けた後の著作である。

『史記探源』は辛亥革命^[3,4]革命以前に完成し、今文学の観点により『史記』の本質問題を推論したものである。『史記』と『漢書』とは、史学の体裁の上では、いずれも紀伝体の歴史書である。相違点は、『史記』が黄帝から漢の武帝までを記載し、「通史」であるのに対し、『漢書』は前漢一時代の歴史事跡を専ら述べ、「断代史」である点においてである。これまで『史記』・『漢書』に対する評価はそれらの歴史書の体裁について専ら立論してきた。たとえば、劉知幾の『史通』の「六家」、鄭樵の『通志』の「総序」などがそれである。漢の高祖から武帝までの歴史事跡については、『漢書』は多くの場合、『史記』に従って記録し、『史記』と『漢書』との文句の異同を専ら調査した学者もおり、たとえば、倪思の『班馬異同評』がそれである。また、文学史の視点から「散」・「偶」の発展を評論したのものもある。しかし、これまで『史記』の内容の本質に区分を加えたものはなかった。『史記

探源』は経学の視点から『史記』・『漢書』に独自の見方を提起した。

崔適は、『史記』は経今文学に属す著作であり、『漢書』は経古文学に属す著者であると考えた。『史記』の中には、今文説及び『史記』全体とに相違する部分、つまり古文説と『漢書』とに合致する部分があるが、これらの部分は劉歆の改竄を経たものであった。彼は次のように言った。「『史記』の文には、全体と矛盾し、『漢書』と合致した部分があり、それもまた劉歆が継ぎ足したものである。」^[35] 「劉は古文の経伝の由来を『史記』に仮託し、『尚書』だけが特に詳しい、」と。しかし、劉歆の「ふれ文を回して太常博士を責める」には、次のようにある。「ある者は『尚書』を完備しているとしている」そうならば、劉歆以前は経学者が伝えたのはもとより孔子が定めた書物であり、伏生の時には完備していたのであり、残缺のテキストではない。『史記』・『漢書』では欧陽生が伏生に事え、倪寛に授け、寛はその『尚書』の学問を孔安国から受け、孔安国がその学問を受けた学者について言わないのは、それが家学であることがわかる。欧陽・大小夏侯の学問はみな倪寛から出、寛は伏氏から出、また孔氏からも出ているから、孔氏の書物は伏生と同じであるのだ。」^[36] 『書』「序」については、「これもまた劉歆の偽作であり、これを孔子に仮託し、『史記』にも改竄を加え、それによって『史記』を百鬼夜行のごとき場所に置くことになった。」^[37] たとえば、「夏本紀」には、「諸侯はこれに背き、」から「孔甲が崩ず」までについて、「各テキストは劉累が龍を飼う事を叙しているが、これは劉歆が『左伝』に竄入し、それがまたこの「夏本紀」に竄入したものである。」^[38] 「殷本紀」には「湯誓〔古文『尚書』の篇名〕」を著し、「湯誥〔古文『尚書』の篇名〕」を著し、「伊尹は「咸有一徳〔古文『尚書』の篇名〕」を著し、咎單〔湯の司空〕は「明居〔古文『尚書』の篇名〕」を著し、「帝太甲元年、伊尹は「伊訓〔古文『尚書』の篇名〕」を著し、「肆命〔古文『尚書』の篇名〕」を著し、「徂后〔古文『尚書』の篇名〕」を著すとあるが、これらは『書』

「序」から竄入し、「そこで「太甲訓〔古文『尚書』の篇名〕三篇を著し」などと言うのもいずれも「『書』『序』から竄入したのである。」『史記』はもともと今文学に属する著作であるが、劉歆の改竄を經ている。

劉歆はなぜ『史記』を改竄しなければならなかったか。崔適は次のように考えた。劉歆は「五経をさかさまにした」^⑧以上、それを『史記』に及ぼしそれを左証にし、王莽が漢の皇位を盗み取ることを助けない訳にはいかなかった。このように経伝を偽造し広範に証拠工作を行うのは、劉歆一人の力のできるものではない。崔適は次のように考えた。「王莽が政権を握ると、天下の、逸『礼』・古『書』〔古文『尚書』〕・『毛詩』・『周官』〔『周礼』〕・『爾雅』・天文・図讖〔予言の書〕・鐘律〔音楽書〕・月令〔農時曆〕・兵法書・史篇文字〔識字教科書〕を所有し、それに精通した者を召し、公車〔天子の上書などを司る宮中の役所〕に出頭させた。やって来た者が前後して数千人で、宮廷でそれぞれの学説を記録させ経書などの書物の誤りを正させようとした。」この「数千人ほど」は、劉歆の意向に基づき、彼の偽経を助けた人々であり、『史記』もほかの書物と一緒に改竄を受けた。崔適は次のように言った。

「劉歆が『史記』に付け足しをしたのは、太史公〔司馬遷〕に不満があった訳ではない。彼は五経をさかさまにしたので、それを龍門〔『史記』〕に及ぼし、左証とし、それを売って新王室の制度文物の絶枝としたのである。彼が五経をさかさまにしたのは、次のような事情による。父劉向が成帝の御世に『春秋』の災異の説を探し取り、『洪範五行伝』を著した。端緒は紛らわしいが、世の例を痛切にそしり皇帝の外戚である王氏をその同類とすることを宗旨とした。劉歆は新王室を補佐尊奉しており、是が非でも父劉向の説に反対した。そこで、彼は孔子の『春秋』を単なる魯の歴史書に帰結させ、自ら『書』『序』百篇を著し、これを孔子に仮託した。このことは後で詳しく述べる。このように劉

歆が『史記』・經書を改竄したので、孔子の宗旨は頓論し、劉向の伝えた説は皆誤りとされた。また、このような改竄には、多く古文經伝を偽造し、広くそのための証拠仕事をせねばならず、そのための文章は膨大な量になる。これは劉歆ひとりのできるものではない。そこで天下の逸『礼』・古『書』(古文『尚書』)・『毛詩』・『周官』(『周礼』)・『爾雅』・天文・凶讖〔予言の書〕・鐘律〔音楽書〕・月令〔農時曆〕・兵法書・史篇文字〔識字教科書〕を所有し、それに精通した者を召し、公車〔天子の上書などを司る宮中の役所〕に出頭させた。やって来た者が前後して数千人で、宮廷でそれぞれの学説を記録させ、經書などの書物の誤りを正させ異説を統一させようとしたと言う。この文は〔『漢書』の〕「王莽伝」〔上〕に記載されている。私崔適が考えますに、劉歆が言う、誤りを正すとは、つまり彼の父劉向の誤りを正すことである。異説を統一するとは、齊・魯・韓の『詩』、欧陽・夏侯氏の『書』を異説とし、これを彼が仮託した孔安国の古文『尚書』・毛公の『毛詩』に統一したということである。逸『礼』以下の書名もまた劉歆が偽造したものである。この数千人ほどは、誰一人として、国師である嘉新公〔劉歆〕の意向を尊重し、妖誣〔怪しく偽り〕の言を根拠もないのにでっち上げ、彼の意見を取り入れない者はいない。そこで、群經はいずれも改竄を受け、『史記』は經書を正す入口であるので、これにも改竄しないわけにはいかなかったのである。^[39]

崔適の『史記探源』は、康有為の『新学偽經考』の影響を深く受けた。この点について、彼は公言して憚らなかつた。既に掲げた、彼が錢玄同に宛てた手紙の中で、康有為をひときわ称赞した。実際、『新学偽經考』第二卷「『史記』の經説は偽經を証明するに充分であるという考察」で康は既に『史記』は「多く劉歆に改竄されたが全体的に見れば明らかで純粹である。その説を『漢書』と比較すればその真偽のほどは一目瞭然である、」と述べ

た。このように康有為は既に崔適に啓示を与えたが、『史記』の中の、今文説及び『史記』全体とに相違する部分を専ら探究したのは、他ならず崔適であった。ただ『史記探源』は文章が簡単で、言葉の使い方が質朴で、根拠が列挙できず、議論も武断に陥り、そのため人を説得しえなかった。

『春秋復始』は1914年に完成し、1918年北京大學出版部から活字版で出版された。この本の主な論点は、『穀梁伝』も古文学であり、また劉歆の偽造して、それによって『左伝』のために『公羊伝』を取り除くことに役立つようにしたということである。彼は次のように言った。

「『漢書』「梅福伝」に、古文の書物の迹を推論すると、『左氏』・『穀梁』・『世本』・『礼記』によって明らかになる、とあり、『後漢書』「章帝紀」に、群儒に『左氏』・『穀梁』・古文『尚書』・『毛詩』を学ばせた、とあり、これらの文献は『穀梁』について、一つは古文であることを明言し、一つは三つの古文の經典と並列して、これが古文であることは明らかである。古文は劉歆が経書の伝・記を色々取り、それらを材料にして偽造したものであるから、武帝・宣帝の御世にどうして『穀梁』が存在し得ようか。……劉歆は『左氏伝』を偽造して『春秋』の学統を篡奪し、また『穀梁伝』も偽造して、『左氏』のために『公羊伝』を取り除こうとした。だから『春秋』の三伝を兼論すれば、『左氏』について述べ、『公羊』・『穀梁』を併論すれば、『穀梁』を尊んだ。……以上のことから、『儒林伝』で『公羊』・『穀梁』の二家が武帝・宣帝の御世に論争したと言っているのは、ちょうど風や影をつかむようにつかみどころのないものである。成帝が綏和元年、夏・殷の後裔を王に立て、梅福が上奏した意見を採用したが、梅福は、その上奏文の中で、『春秋経』の「宋はその大夫を殺した〔僖公二十五年〕」という部分を引用し、また、『穀梁』のそれに対応する伝文、「その姓名を称しないのは、その祖先の位に免じてのことで、これを尊んだからだ」を引用

した。これが『穀梁』を引用した最初である。河平三年劉歆が書物の校訂をはじめてから十八年後であった。劉歆が偽造した書物は既に古文として登場したのである。^[40]

彼は、『左伝』・『国語』は「もともと周末の異聞であり、春秋時代の信用できる歴史書ではなく、」劉歆はこれらを手に入れ、事実が異なるからには義理として異を立てることができると考え、その上に経書の伝・記から色々を取り、それに憶説を付け足して、『左伝』・『穀梁』の二伝を偽造し、それによって『春秋』の本来の姿を破壊した。^[41]と考えた。かつて、一般には、『公羊』・『穀梁』は併称され、今文の書物とされていたが、崔適のこの書物が出版されると、『穀梁伝』も問題となったのである。崔適は、『穀梁』を劉歆の偽造と考えたが、もとより普通の学者にはいまだ承認されていない。しかし、『穀梁』の作者については、確かめるべき記録はなく、それが一人の手になるか否かということも自ずと問題がある。崔適は、既に『穀梁伝』を古文であると考え、それは改竄を経て、左丘明もまた『春秋』を伝ええない」とした。このように、「『春秋』を伝える」ものは、ただ『公羊伝』だけとなった。そこで、彼は「『公羊伝』はその名を正し、『春秋伝』と言うべきである」ことを提起した。それには、次のようにある。

「前漢の初め、所謂『春秋』とは、経と伝とを合わせて名付けたものであった。この伝とは、後世の所謂『公羊伝』である。その初めは、『公羊伝』という名称がないだけでなく、また伝という名称もなく、まとめてこれを『春秋』と言っていた。……つまり『公羊伝』という名称は劉歆から始まったのである。子夏が『春秋』を公羊高に伝えたという説は戴宏から始まり、『史記』「十二諸侯年表」・「仲尼弟子列伝」・「儒林伝」にはいずれもその記載がなく、特にその文には斉の言が多いのは、竹帛に文字を記した者がもともと斉の人であったからであり、その人の名前についてはいずれも調べようがない。今、『公羊伝』

はその名を正し、ただ『春秋伝』と言うべきであり、『左伝』・『穀梁』などは偽託であり、その伝という名を改めなければならぬ。^[42]

このように、『春秋』三伝は、その内、信用できるのは『公羊伝』だけになった。

崔適の著作『史記探源』・『春秋復始』は、この当時、今文経学が經部（經書の部類）の範囲の中で、經ごとの研究であろうが、または総合的研究であろうが、いずれも発展の余地がなくなったことを反映した。そこで、彼、崔適は經書を治めることから歴史を治めることへ転じ、まず『史記』を研究対象とし、『史記』と『漢書』との今古文問題も提起した。いかにも経学の領域を拡大したかのように見えるが、經書から歴史書に研究対象が及んだのは、実際には經書中からだけでは經書を考証することができず、「年老いてまで經書の奥義を追究し」ても出口を簡単に見つけ出せなくなったことを反映したのである。

崔適の著作『史記探源』・『春秋復始』は、今文の陣営を厳守する人が經書に疑いを持ち、歴史書にも疑いを持ち、「経学」の視点から『史記』・『漢書』の相違を明らかにしようとしたが、常に一面的になりがちであり、そのことは、「経師（旧来の経学者）」式の研究が既に末路に陥ったことを示していることを反映した。

崔適の著作『史記探源』・『春秋復始』は、經書の中には孔子以後の儒家の手になる贗物もあれば、歴代の儒家の解釈した憶説もあることを反映した。かって今文と考えられた、『穀梁伝』も「改竄」を経た書物となった。このように經の信用できる範囲がどんどん縮小し、「經」の疑わしい程度もますます激しくなった。「經」の地位が動揺し、二千年來思想界に支配的な地位を占めてきた経学は終結した。

しかし、経学の終結は決して封建思想の終結を意味しない、儒家思想の市場の消失もそれを宣揚する人がいないことを意味しない。中国の封建的

伝統は非常に強固であり、「歴史の惰性」となり、いくらかの歴史の潮流に逆行する人はいつも孔子や経学を復活させようとして、そのわずかに残った影響力を利用し、反動的世論に飾りを添えた。特に中国革命が浸透し人民の力が強大であった時、まだ経学という屑を拾い、挽回を試みた。北伐戦争の直前、北洋軍閥段祺瑞〔1865～1936〕・呉佩孚〔1872～1939〕は孔学を称賛し、孫伝芳〔1885～1935〕も南京で礼制を復活し、投壺^⑤をし、また彼の管轄する江蘇教育庁も1926年8月8日、「省立各学校に訓令し」、「読経は修斉治平〔修身・齐家・治国・平天下〕などの大なる端緒を包括し、善良な風俗に陶冶する働きがあり、各学校は公民科または国文科の授業の中でそれぞれ重要なものを選んで授けて、それを暗唱しながら学ばせなければならない。^{〔43〕}」西山会議派の戴季陶〔1891～1949〕は『孫文主義哲学の基礎』を著し、孔子の「仁愛」を「革命道德の基礎」と言い、この「仁愛」によって階級闘争に反対し、「共産主義は中国国情に適合しない」ということの根拠としようとした。蒋介石が権力の座に就くとほどなく、そそくさと曲阜に行き孔子を祭り、孔子を更に「千秋仁義の師」・「万世人倫の表」に封じ、「孔廟の文化を保護することは、思うに共産主義の根本を取り除こうとすることであろう、」と公言した。1934年、更に強行に、「礼義廉知」を標榜する新生活運動を推し進めた。この後、更に孔子の誕生日を「教師節」と定めた。日本帝国主義が中国に侵入すると、また読経を日本占領地区の中学校の必修課程とした。経学は終結したがその余炎はまだくすぶっていた。

新中国成立成立後、土地改革を経て、封建地主の経済的基盤はもうなくなった。しかし、数千年の封建的余毒はまだ決して清算されていない。知らず知らずのうちに芽生えることもあり、直にそれは社会主義の発展と強化を妨害し破壊した。このことは徹底的に思想を解放し五四時期始まった反封建革命を完成することがどれほど重要なことを説明した。

原注

- [1] 『毛沢東選集』第2巻第693ページ。
- [2] 1913年5月出版され、「孔子二千四百六十四年五月」と書き記す。
- [3] 顧頡剛、『古史辨』「序」、『古史辨』第一冊「自序」第26ページに見える。
- [4] 顧頡剛、『古史辨』「序」、『古史辨』第一冊「自序」第26ページに見える。
- [5] 顧頡剛、『古史辨』「序」、『古史辨』第一冊「自序」第36ページに見える。
- [6] 顧頡剛、『古史辨』「序」、『古史辨』第一冊「自序」第43ページに見える。
- [7] 顧頡剛、『秦漢の方士と儒生』「序」第6～7ページ、上海古籍出版社、1978年2月版。
- [8] 康有為、『新学偽経考』「漢書劉歆王莽佞辨偽」第六。
- [9] 顧頡剛、『古史辨』第五冊「自序」第7ページ。
- [10] 顧頡剛、『古史辨』五冊「自序」第10～11ページ。
- [11] 『古史辨』第五冊に見える。
- [12] 顧頡剛、『古史辨』第一冊「自序」第43ページ。
- [13] 顧頡剛、「『辨偽叢刊』を編録することに答える手紙」
- [14] 顧頡剛、「私はどのようにして『古史辨』を編著したか」、「中国哲学」第六輯に見える。
- [15] 顧頡剛、『古史辨』第一冊「自序」第43ページ。
- [16] 顧頡剛、『古史辨』第一冊「自序」第44ページ。
- [17] 顧頡剛、『古史辨』第二冊「自序」第6ページ。

- [18] 顧頡剛、「『中国上古史研究授業』第二学講義序目」、『古史辨』第五冊第258ページに見える。
- [19] 梁啓超、『清代學術概論』
- [20] 顧頡剛、「『中国上古史研究授業』第二学期講義序目」
- [21] 顧頡剛、「孔子六経刪述説と戦国著作偽書とについて論ずる手紙」、『古史辨』第一冊上第41～42ページに見える。
- [22] 顧頡剛、『古史辨』第一冊「自序」第35ページ。
- [23] 顧頡剛、「『中国上古史研究授業』第二学期講義序目」、『古史辨』第五冊第257ページに見える。
- [24] 顧頡剛、「『詩経』の経歴及び老子と道家を論ずる手紙」、『古史辨』第一冊上第35ページ。
- [25] 顧頡剛、「中国史を整理する意見を自ら述べる手紙」、『古史辨』第一冊上第35ページに見える。
- [26] 顧頡剛、「中国史を整理する意見を自ら述べる手紙」、『古史辨』第一冊上第36ページに見える。
- [27] 顧頡剛、「錢玄同先生と古代史を論ずる手紙」、『古史辨』第一冊中第59ページ。
- [28] 顧頡剛、「私はどのようにして『古史辨』を編著したか」下、『中国哲学』第六輯に見える。
- [29] 柳詒徵、「『説文』によって歴史を証明するには、先ず『説文』の詁例を知らなければならないことを論ずる」、『古史辨』第一冊第2～7ページ。
- [30] 顧頡剛、「孔子の学説はなぜ秦漢以来の新社会に適応したかを質問する手紙」、『古史辨』第二冊中第151ページ。
- [31] 顧頡剛、『古史辨』第二冊「自序」
- [32] 顧頡剛、「私はどのようにして『古史辨』を編著したか」下、『中国

哲学』第六輯に見える。

- [33] もともと章太炎の弟子であった錢玄同は、五四時期に、「古代を疑い経書を疑い」、同様に崔適の影響を受けた。彼は次のように言った。
「1907年、劉逢禄・龔自珍両名の今文学者の著作を吟味し、初めて師（章太炎）に背き、今文家の言を宗とした。1911年、康有為・崔適の著作を読み、今文を専ら宗とした。」（『今古文経学と辨偽叢書を論ずる手紙』、『古史辨』第一冊）、その上、「1911年から1913年までの三年間、玄同は時々崔君へ疑いを質し、教えを請うた。1914年2月には、手紙で御機嫌伺いをし、その時から弟子を自称した、」と。
（「重ねて今古文問題を論ずる」、『古史辨』第五冊に見える。）
- [34] 朱祖謀の『史記探源』「序」は、「宣統二年庚戌の仲冬（11月）」に著され、この書物が辛亥以前に完成したことがわかる。
- [35] 崔適、『史記探源』卷一「要略」第一葉、北京大学1922年6月再版本、以下同じ。
- [36] 崔適、『史記探源』卷一「『古文尚書』」第七葉。
- [37] 崔適、『史記探源』卷一「書序」第九葉。
- [38] 崔適、『史記探源』卷二「夏本紀」第二、第十葉。
- [39] 崔適、『史記探源』卷一「竄乱」第一葉。
- [40] 崔適、『春秋復始』卷一「穀梁氏もまた古文学である」、北雄大学出版社活字第二葉、以下同じ。
- [41] 崔適、『春秋復始』卷一「春秋を以て春秋と為す」第五葉。
- [42] 崔適、『春秋復始』卷一「公羊伝はその名を正し、春秋伝というべきをものである」第一～二葉。
- [43] 『時事新報』、1926年8月12日、「学灯」欄。

訳注

- ① 湯志鈞氏の経歴については、湯志鈞著「私の自伝」（『中国当代社会科学家』第九輯、書目文献出版社、1986）、湯志鈞談、原島春雄翻訳まとめ「一経学者の半世紀」（『中国近代の思想家』、岩波書店、1985）、近藤邦康「中国の解放世代と思想史研究」（『中国近代の思想家』、岩波書店、1985）に拠った。
- ② 旧中国では、経学は、国家権力と結びついた教学であった。そのため、たとえば、高級官僚の登用試験である、科挙には、主要科目の一つとして経学が課せられ、士大夫〔知識人〕はそのために経学を学ぶ必要があった。つまり、経学には実学としての面、つまり商品としての一面があったのである。だから、ここで、経学「市場」という言葉を使用したのである。
- ③ 孔子には歴代王朝から様々な称号が贈られた。主なものを挙げると、漢朝から贈られた、褒成宣尼公、唐朝から贈られた、文宣王、宋朝から贈られた、至聖文宣王、元朝から贈られた、大成至聖文宣王、明朝から贈られた、至聖先師孔子、清朝から贈られた、大成至聖文宣先師孔子がある。歴代王朝は、孔子に称号を与えるだけでなく、孔子の子孫にも爵位を与え、孔子の生地、曲阜に封じた。なお、この「大成至聖先師」という称号はないが、これは、孔子に対する称号に準じて使われたものである。
- ④ 経書とは、『詩』・『書』・『礼』・『楽』・『易』・『春秋』を指し、聖人孔子が刪述したものとされる。伝とは、経書を伝え、解説したものである。また、記も経書に対する注釈書である。『春秋』の伝である、『左伝』・『公羊伝』・『穀梁伝』、『礼』の記である、『礼記』は唐代に経書に昇格した。
- ⑤ Keyserling, Hermann Alexander, Count (1880~1946)、ドイツの哲学者。ロシアのエストニアの男爵家に生まれ後に、ドイツ国籍となる。1911年、世界一周旅行を行い、中国を通過した。その際、孔子の教えを

高く評価し、尊重した。次の年、『哲学者の旅行日記』(Reisetagebuch Cines Philosophen) 2巻を発表し、名を成した。1919年、ヒスマルク公爵の孫娘と結婚し、1938年ヒットラーに反対し、その著作はドイツ国内で発禁となった。

- ⑥ 『古史辨』(1926~41年、全七冊)を中心に活躍した、疑古を中心思想とし、これまでの伝統的な古代史像を塗りかえようとした、歴史・哲学の研究者グループで、その中には、顧問格の胡適・錢玄同と主宰者の顧頡剛の他に、羅根沢・童書業・呂思勉・楊寬など、後の学界をリードする錚々たる学者たる学者たちがいたのである。
- ⑦ 『古史辨』「自序」の扉に、ロダンの『芸術』の序文の一節、「根底から、容赦なく、真理を語る者であれ。……」が掲げられている。顧頡剛が様々な圧迫の中で、伝統的古代史像を疑い、真の古代史の姿を追究し、「真理を求めた」のは、ただ単に彼の学問的好奇心の所産というよりは、当時中国に流入したヨーロッパの近代的人間観・学問観に彼が少なからず影響されたためではないかと思われる。彼は五四時期、北京大学の進歩的學生たちによって創刊された、『新潮』の編集にも関わり、第二号に「旧家庭についての感想」という一文を書き、家族制度批判を行っている。彼は、ただ学問に埋没する人ではなく、常に人生に悩み、社会に関心を持ち、真摯に生きようとした知識人であったのである。
- ⑧ 当時、経書は今文系と古文系との二つに分かれ、学官に立てられた五経は全て今文系であった。劉歆は前漢の哀帝の建平・元寿の間(B.C 6~1)に太常博士・孔光などの今文学者と論争し、古文系の古文『尚書』・逸『礼』・『左伝』・『毛詩』を学官に立てようとしたが、実現しなかった。後に平帝の時、王莽の後楯によって勢力を得た劉歆は強引に古文『尚書』・逸『礼』・『左伝』・『毛詩』を学官に立てた。今文学派に立つ崔適から見ればそれは、まさしく五経の正邪をさかしまにした行為に他ならな

かった。

- ⑨ 投壺とは、『礼記』「投壺」に見える中国古代の礼で、宴会において主人と客がそれぞれ壺へ矢を投げ、入った数を競うもので、負けた方が罰として酒を飲むものである。孫伝芳は東南五省（浙江・福建・江蘇・安徽・江西）を地盤とした直隸系呉佩孚系の軍閥で、1926年8月6日、南京において投壺の礼を挙行した。なお、かつて革命派のイデオログであり、当時、国学大師として尊敬されていた、章炳麟はこの投壺の礼に関わり、弟子魯迅を失望させた（「章太炎に関する二、三のこと」『且介亭雜文末篇』）。